

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530935

研究課題名(和文) 他者・社会との関係性を基盤とした高校学習実践の意義：生徒の文章分析を通して

研究課題名(英文) Rethinking of the meaning of study in high school in Japan:focusing on relationship between students and society

研究代表者

高橋 亜希子 (TAKAHASHI, Akiko)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90431387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：現在、高校における学びの貧困化・歪みが指摘される。本研究では、(1)実践校観察を通じた高校における学習の現状把握、(2)生徒の事例分析を通じた学習の意義の検討、を通し高校の学習の内実を豊かにする教育実践の可能性を探った。10以上の高校の授業を訪問し、その中から 他者や社会との関係を深める英語の授業の分析、 困難校での内面的な課題と授業を繋ぐ発達支援を目指した授業の分析、 スウェーデン・アメリカの高校の探究学習に関して「履修主義」と「理解主義」からの考察を行った。

研究成果の概要(英文)：I conducted ethnographic research from 2013 to 2015 in more than 10 high schools, including class observation, interviews and analysis of texts written by students. I analyzed one English class and Modern society classes thoroughly.

C high school: Teachers are trying to help recover their students' self-esteem. Their students have many difficulties. E teacher reorganized his modern society class curriculum and tries to introduce people of the same generation who tried to overcome their trauma and also encouraged students to write about themselves. They could gradually talk about themselves with each other and nurture friendships. Talking with each other and make perceptions or find themselves is important for high school students. We need to think about how we can provide them with educations that will prepare them for life.

研究分野：臨床教育学

キーワード：高校 総合学習 発達支援 探究学習 協同学習 学習指導

1. 研究開始当初の背景

現在、高校における学びの貧困化・歪みが指摘される。公立高校においては、国公立大学の入学者数が学校の評価につながり、私立高校でも少子化による生徒数の確保のため、進学対策・学力向上に力を入れる傾向がある。子安(2008)は、このような現在の高校の状況を「学びの貧困化」と呼んでいる。その理由として、第一に、現代の高校生に必要な学びではなくて、進学先と人数、資格取得ばかりを問題とすること、第二に、知識と解法スキルの記憶を強いる学習を蔓延させていること、第三に、記憶力に長けているが、学習される内容そのものの文化性・科学性をとらえ直すことが軽視され、結果として批判的に学ぶことが認められていないことがある。

2010年9月の実施の学校生活基本調査において、高校では講義形式の受動的な学習が中心になる傾向が見て取れた。受験競争が緩和したことに加え、進学しても、それ以降の生き方が保障されない状況の中で、青年は学習に対して資格取得や学歴以上の意味を見出せなくなっている。本田(2011)は高校生が「自分がどうなってしまうか不安になる」(49.4%)「社会に出て行く能力があるか自信がない」(24.6%)という状況を指摘している。

その中で、雇用に関する学習、協同学習、探究学習など生徒が社会状況を問い直し、人々と関係を結び、自身の生き方を見出す試みも現れている。

生徒が社会状況を問い直し、周囲の人々と関係を結び、自分自身の生き方を見出す高校教育実践の可能性はあるのだろうか。高校教育の内実を豊かにする現状で行われている取り組みを3点挙げる。

第1に生徒が社会や労働とのつながりを見出す教育実践の試みがある。井沼(2010)は、労働法を題材とした現代社会の授業を行っている。生徒は自身のアルバイトの「雇用契約書」を検討し、労働基準法や労働者の権利の学習を通して、労働と生活に必要な知識を獲得している。

第2に協同学習への取り組みがある。教員が授業中常に前に立つ講義形式の授業ではなく、問いを中心として生徒同士の対話と気づきを組織する、学びあいと参加を中心に置く授業の試みである。

第3に探究学習の実践の試みがある。高校での「総合的な学習の時間」は低調であるが、1990年代からの「課題研究」「産業社会と人間」などの授業の導入、高大連携の増加、スーパーサイエンスハイスクールでの取り組みなどを通し、実験や調査活動を中心とした教育実践が進学校、総合学科、工業、商業科などで実施されている。

2. 研究の目的

本研究では、(1)実践校観察を通した高校における学習の現状把握、(2)生徒の事例分析を通した学習の意義の検討、を通し高校の学習の内実を豊かにする教育実践の可能性を探り、高校教員のサポートを目指す。

3. 研究の方法

実践観察を通した学習の現状把握

一つは特色のある学習実践を訪問し観察することである。今回の研究期間中に訪問した学校は以下の通りである。

高校

訪問校	日時	
和光学園高校(東京)	2012年6月、10月、11月、2013年11月	望月・大津氏(12年10月)
京都府立園部高校	2013年2月	望月・大津氏
埼玉県立新座高校	2013年2月	
埼玉県立所沢西高校	2013年11月	
北海道立A高校	2013年2月	研究会
神奈川県立B高校	2014年2月、2015年2月	
北海道北星余市高校	2014年12月	
北海道立C高校	2014年7月、11月、2015年1月	
北海道立富良野高校 教諭訪問	2014年12月	

高校は、特色ある授業作りを行っている高校を中心に訪問した。

和光学園高校(東京都)は、計4回訪問(2012年6月、10月、11月、2013年11月)した。私立の高校で創立時から総合学習に力を入れている。また、教科の授業でも、テーマを中心としたユニークな教育実践を行っている。訪問時の高校2年生の英語の授業は、短い劇の脚本をグループごとに作成していた。2013年には「食と地域」という農業体験の授業を見学した。2012年には朝鮮学校に訪問した英語の総合学習の観察に伺った。その見学に関しては、授業分析を行ったので結果の部分に記す。

園部高校(京都府)訪問(2013年2月18日)は英語の授業を二つ見学した。地域高校であり、また学科が複合しているため、学力差が大きい高校の中での文法を中心とした授業の工夫を見学した。

訪問時には必ず授業記録を記した。2012年11月の和光高校訪問と2月の京都府立園部高校は研究協力者の望月一枝(秋田大学)大津尚志(武庫川女子大学)と共に訪問した。3人での訪問の際は、一つの授業を見て、記録

とレポートを書き、授業を行った教諭から感想を頂くという形式で授業検討と振り返りを行った。

協同学習である「学びの共同体」を行っている高校として新座高校(埼玉県)(2013年2月)所沢西北高校(2013年11月)(埼玉県)の授業を見学した。他に北海道富良野高校で2013年までに行った授業観察とグループ学習の試みについてインタビューを行った。単独訪問の場合も必ず授業記録を記した。

2014年から2015年にかけては、生徒の発達支援に力を入れている高校の困難校の訪問を中心に行った。B高校(神奈川県)は2014年2月と2015年2月の2回訪問し、授業観察と図書室の様子を観察した。北海道のC高校は、1年生の授業観察に3回訪問した。これについても結果のところでも記述する。

小学校

訪問校	日時	
奈良女子大学附属小学校	2013年2月	協同学習
琉球大学附属小学校	2013年12月	協同学習
北海道教育大学附属旭川小学校	2012年7月 2013年7月 2014年7月	総合学習
札幌市立平岡中央小学校	2013年9月 2014年10月	学びの共同体
お茶の水女子大学附属小学校	2015年2月	市民性教育

高校訪問に加えて小学校の協同学習・探究学習の訪問を行った。高校が研究の中心であるが、高校は公開研究会が少なく、また長期の探究学習を行うことも少ないため、総合学習や協同学習を行っている研究校を中心に授業見学を行った。2011年に訪問した富山市立堀川小学校の授業実践については「子どもが創る授業を追究する堀川小学校の調査研究 - 教師の働きかけに焦点を当てて」(北海道教育大学紀要)、北海道教育大学附属旭川小学校の教育実践については「総合学習「旭川名物をつくろう」の継続観察」(北海道教育大学紀要)として論文の発表を行なった。

海外の高校

訪問校	日時	
フィンランド ヴァンター市 ヴァスキブオリ高校	2015年3月	普通科
フィンランド ヴァンター市 ルモ高校	2015年3月	普通科

ほかに、フィンランドの高校を訪問し、その授業を見学した。現在「高等学校基礎学力テスト」など、在学中の複数回テストを行う方向が日本でも打ち出されている。フィンラ

ンドは在学中の大学入学資格試験の受験が卒業のために必要であり、日本が導入しようとしている形に近い。大学入学資格試験のよすすと普通科高校の授業を見学した。

4. 研究成果

英語の授業の分析

：他者や社会と関わり振り返る

2012年から2013年2月にかけての高校訪問や研究会参加を通して、高校の学習をめぐる状況の息苦しさを感じた。1年生からの進学指導や、文部科学省の指定を受けていればその目標の達成など、高校生の様子や学習よりも外部の目標の達成に主眼が置かれ、閉じた学習になる傾向があることが感じられた。

そこで、他者や社会との関係を深める学習の試みの紹介と生徒の変容を分析することを目的として、2012年10月に訪問した和光高校のS教諭の英語の授業を取りあげ、授業の逐語録と生徒の感想をもとに、授業を通した生徒の変容を分析し、学会発表を行った。

対象の授業は高校2年自由選択科目『英語演習I』である。S教諭は英語という教科の本質を「他者・異文化との出会い」と置き、異文化の人々と出会う機会を授業に取り入れている。通年の授業であり、朝鮮学校、インターナショナルスクール、インドネシア学校の訪問と交流を通し異文化を考察することが目指されている。筆者が参観した授業は朝鮮学校訪問後の振り返りの授業である。生徒はコの字に座り、生徒の訪問の感想をS教諭が英語に訳しつつ共に振り返っていた。

分析では、2時間続きの授業の後半のディスカッション部分での、IさんとTさんという二人の生徒の発言に焦点を当てた。

Iさんは、朝鮮学校の生徒の話の聴いて、「日本人」の意識ではなく、「朝鮮人」としての意識を強く持っているんだなと思いました」「在日朝鮮人は日本に行きたかったり仕事を求めてきたのではなく、歴史的なことで来た人がたくさんいることを学んだ。」と共感を持った生徒である。

ディスカッションの中でIさんは朝鮮学校の生徒のプライドは支援のなさや対等に扱ってもらえない逆境に対して作られているのではという意見を述べた。

I 彼らは日本に住んでるからなおさら思うだろうけど、日本に住んでるからそうやって例えば日本人じゃない扱いを受けたり、学校の支援もらえなかったりして大変だけど、だけど自分は朝鮮人、日本人じゃない朝鮮人という気持ち。

S教諭 いいよ。よく伝わった。It is the

pride against Japanese. なんじゃないかってことだね。日本の中で生きていること、そして生きている中でさまざまに感じられる逆境に対するものとして作られているものなんじゃないかってことな。Okay?

一方で朝鮮学校の生徒に違和感を感じたのがTくんである。

T 彼らはとてもまじめでした。だから僕はちょっと冗談を言い合ったりとかできるような仲にはなれないなあって思ったのが始まりです。

S教諭 なるほど。T、まじめってどういう意味？ どういう意味で使ったんですか。

T 俺がまじめだと思ったのは、キム何とかっていう人を尊敬していたりとか、そういうところですかね。

S教諭 政治的に関心が高いってこと？

T それもあるし、例えば、僕が竹島のことを、ついポロツと言っちゃったりすると、なんかめっちゃ怒りそうとか。彼らと話すとしたら、なんかいちいち気にしなくちゃいけなくて。

本当の友だちってさあ、何でも言い合えたり。まあ親しい仲にも礼儀はあったほうがいいと思うけど、そのほうが楽しいし。そういう間柄っていうのは、やっぱり悲しいことだけど、無理だと僕は思いました

Tくんは、ディスカッションの終了後「日本と朝鮮にはやはり大きな違いがある。みんなは仲良くできるといっているが朝鮮人と日本人が仲良くするのは難しいと私は考える」と感想を書いた。

一方、Iさんは「自分は朝鮮学校や生徒たちの考えていることに共感できたけれど、反面外部からの違う視点もあるなと気付かされた。それは彼らが教える教育が日本人や政府に“危険”とひとくりにされてしまうことです。もちろん政府や日本人の知識がないのもあるが、日本人にとって都合の悪い教育をされるのも危険という中に入るのだと思いました（私はそれが悪い教育だとは思いませんが）」と感想を書いた。

Iさんは、異なる立場の人の判断や行動をその視点から考え、事実や歴史を知り、自らの価値観、認識を問い直している。一方Tくんは他者性を感じ異質なものとして遮断する姿勢を持っている。

青年期においては社会への批判が強まり、他者に厳しい視線を向けることもある。一方でマスコミの語る言説の中に浸されている。それを問い直す機会は日常生活の中で多くはない。訪問やディスカッションは、多面的な認識の形成に寄与している。一方で訪問で接

したものについて、認識同士をより深く付き合わせて語る機会も必要と思われた。

困難校での授業分析

内面的な課題と授業を繋ぐ発達支援

生徒の声の分析の二つ目として、困難校での授業実践の観察とその分析を行った。

高校の困難校は、現在、発達障害・情緒的な困難を抱える生徒が多く入学する。以前は困難校においては「荒れる」いわゆる非行や暴力、暴走族など、行動化への対処が主であったが、現在は行動化せず、家庭問題をただ抱えていたり、ネット依存など課題が内に籠る「静かな荒れ」が指摘されている。卒業後も困難な仕事が待ち受ける可能性が高い。

思春期は「自己の問い直し」が可能な時期でもある。情緒の安定性、他者への信頼感、自尊心など、人としてのコアを再構築させることが大切である。

生徒の内面的な課題と授業を繋ぎ、生徒の発達支援に資する高校の授業の試みとして、北海道の困難校であるC高校における、現代社会のE教諭の取り組みを分析した。C高校は現在1年生は10名程度である。いじめの経験があったり、複雑な家庭背景のある生徒が多い。

E教諭は同校の教育相談担当であり、その相談室には多くの生徒が来室する。E教諭は、同校の社会科（現代社会、日本史、世界史等）の教員であり、現在は通年で週に2時間1年生の現代社会を担当している。現代社会の内容は「自己受容・自己理解の形成・促進」「現代社会の課題の把握」「宗教、自由」「民主政治」などだが、順序、内容を多少組み替え、生徒の状況や声に近いと思われる題材を用いている。最初の授業では入学式後に生徒が自己開示する高校のドキュメンタリーを見た。「クラスの人に自分のことを言えるってすごいなって思ったし、自分も友情を深められたらと思います。今もまだ人と本気で向き合えていないし、本当の友だちもいないし、誰のことも信じられていないし、まだ上辺だけけど、これからは本当の自分を出してあげたいなと思います。やっぱり一人で生きていくのは「淋しい」って心のどこかで思っていて、でもそれをなかなか他の人に言えないから困っています。」生徒は自分自身・クラスメート・親・教員への不信感を抱きつつ、信頼できる友人・大人を希求していることが読み取れる。

E教員は“現代社会通信”を作り、毎回の生徒の感想を匿名でまとめ共有している。1学期はスマートフォン、同世代のボーカリス

トを題材とした授業、現役弁護士の憲法授業などが実施された。現在まで中退者はなく、生徒同士の関係性も築かれつつある。

筆者は7月、11月、2月にC校を訪問し授業を観察した。ビデオの逐語記録を基にE教諭と授業記録・検討会を行っている。

1年生の約10か月の過程では、生徒が今までの自身を振り返り、語れるようになってきたこと、自己表現ができるようになってきたこと、他者への信頼感が生じ、友人関係を形成してきたこと。学校が居場所と感じられていることなどの成果が現れている。退学者が一人も出ていないことであろう。7月のときは、自分を抑えて石や木のようにじっとしていた彼らが、12月には氷が溶けたように青年の表情になってきたように見えた。

その背景には、第一に、入学前のつらい経験への共感、人を信頼してよいなどのB教諭のメッセージが、生徒のテーマや求めと重なっていたことがあると思われる。そのメッセージは生徒の状況と的確に重なり、生徒の内省や自己表現を促している。教材のねらい、生徒の見とりは、E教諭の相談室での個別相談に支えられていると思われる。他に、マンガや同時代の若者が登場するビデオなど、生徒が共感できる題材を用いていること、必ず授業の感想を記すようにし、生徒の感想、感情を言語化させ、自己表現を促していること、授業の感想を教科通信化することで、互いの内面を共有させ、クラスメートへの共感と、仲間作りを促していることが、あると思われる。他に、学校が少人数で、関わる大人も多く、生徒にとって安心できる空間であることもあるだろう。

海外の高校の探究学習とその背景： 「履修主義」と「理解主義」

本研究の一環として、日本の高校のカリキュラムの特徴を海外の高校のカリキュラムと比較するために、フィンランドの高校に訪問し、またスウェーデン、アメリカの高校での探究学習の分析、考察を行った。

日本の高校の学習は大学受験に規定されるところが多く、探究学習を行ったり生徒が自身の考えを表現・記述する機会は少ない。しかし、アメリカでは生徒がエッセイを記すことが普通である。

スウェーデンでも、以下の3点の特徴がみられた。第1の特徴として、実験や調査に多くの時間が割かれていることがある。幼稚園の観察に行く心理学の授業、分離と合成についての実験を行う化学の授業など、講義とともに、実験や調査・発表が必ず行われていた。そして、理論と実践の往還が重視されていた。第2の特徴は、「理解すること」に学習の基

準が置かれていたことである。指導要領では習得する知識を細かく定めるといよりは、事象の特徴を理解することに重きが置かれた。第3の特徴は、生徒の内発的動機が重視されていることである。

スウェーデンで観察・実験が多く実施できる背景には、日本との大学受験のシステムと学習指導要領の違いがある。スウェーデンでは、大学進学は高校の成績でほぼ決定され、探究活動も、国で評価基準を定めている。スウェーデンでは、探究学習に評価があり、そして進学に繋がることが生徒の動機に結びついていた。また、指導要領の内容も「理解すること」に重きが置かれているため、レポートやプレゼンテーション、実験などの学習過程も成績評価の中に含まれていた。

スウェーデンと日本では、高校の学習の成り立ち方が違い、日本は、指導要領で知識の体系が示されていて、それを取付したかをテストで測る「履修主義」の学び、スウェーデンは、事象の原理を理解することに重きが置かれ、レポートや発表でそれらを測る、といういわば「理解主義」ということができるだろう。

まとめ：新テストとの関係

最後に2014年末に示された新テストとの関係で考察を行いたい。

高校政策は、受験競争の緩和により「高校教育の質保証」に向かっている。2014年12月の中教審の答申で、大学入試改革案が提示された。一つは「発展レベル」試験と呼ばれる「大学入学希望者学力評価テスト」であり、年複数回実施で「合科型」や「総合型」、記述式試験の導入が検討されている。もう一方は「基礎レベル」試験と呼ばれる「高等学校基礎学力テスト」で、すべての高校を対象に、国語総合、数学、英語、世界史、現代社会、物理基礎、コミュニケーション英語など高校の必修科目に関する試験を行うものである高校2、3年在学中に複数回受験可能（年間2回程度）であり、就職試験などでの学力の査証として用いられることが想定されている。

この流れは先ほどの「履修主義」「理解主義」という言葉を用いるならば、上の二つの方向性を同時に強めようとするものである。発展テストは「理解と表現」に重きを置き、思考力や教科横断的な力を求めている（理解主義）。一方で指導要領の内容は増え、基礎テストも教科中心の内容である（履修主義）。新テストの導入は、在学中に二つの複数回テストが存在することになるため、実際には「履修主義」を強めるものと思われる。

しかし、C校のような困難校の多くの生徒にとって、教科の学習は、不得意で、意味を見いだせずに来たものである。通常の授業を

ただ行っても彼らはまた自身を閉ざしてしまうだけではないだろうか。生徒の自己表現を促し、自身を振りかえり他者への関係性を回復する学習をこそ目指すべきではないだろうか。

また、高校生の学習意欲の低下を考えると日本の「履修主義」が現在の高校生のニーズと合わなくなっていることも考えられる。終身雇用が崩れ、学歴の実効性が乏しくなり、競争も弱まった今、文部科学省が定めた知識の体系を学ぶことに動機を持たせることが、もはや難しくなっているのかもしれない。生徒自身が実感を持って学べる学習や、生きていく際に必要と思える学習、すなわち生徒が内発的動機を持てるような学習がやはり必要と思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

高橋亜希子、海外における学習意欲を高める試み-スウェーデンの高校の事例を通して、教育と医学、査読無、63(4),34-43、2015年4月

高橋亜希子、学習指導と生活指導(発達支援)をつなぐ試み「授業」を通して生徒の自己表現と内省を支援する、<若年市民層>の教育エンパワメントの実践構造と促進方策に関する臨床的研究(科学研究費補助金最終報告書 代表者 菊地栄治) 査読無、159-178、2015年3月

高橋 亜希子、北海道の全国学力学習状況調査をめぐる状況、北海道教育大学紀要、査読無、64(2),141-156、2014年8月

高橋亜希子 総合学習における課題設定過程、質的心理学研究、査読有(12),138-155、2013年3月(日本質的心理学会) 新曜社。

高橋 亜希子、総合学習「旭川名物をつくろう」の継続観察、北海道教育大学紀要、査読無、63(2),143-154 2013年2月。

坂井誠亮・浦瀬潔・高橋亜希子、子どもが創る授業を追究する堀川小学校の調査研究-教師の働きかけに焦点を当てて、北海道教育大学紀要、査読無、63(1),161-176、2012年8月

〔学会発表〕(計7件)

高橋亜希子・勝浦眞仁・竹本克己・川端美穂・藤田由美子・川島大輔・大倉得史、教育実践者の発達に資する実践の観察と

記述、第26回日本発達心理学会、東京大学(東京)、2015年3月19日

Takahashi Akiko, Recent Attempts to Improve Curriculums and Lessons in Japanese High Schools, The 5th Pacific Rim Conference of Education, University of Taipei, (Taiwan), 2014年11月4日。

高橋亜希子、フィンランドと日本の教育政策の状況、フィンランド教育研究大会 in ひがしかわ、東川町農村環境改善センター(北海道東川町) 2014年6月5日

高橋亜希子・望月一枝「他者・社会との関係性を基盤とした高校実践の検討:英語の授業とシティズンシップ教育」日本教育方法学会第51回大会 埼玉大学(埼玉県さいたま市) 2013年10月5日。

高橋亜希子、海外の高校における探究学習-スウェーデン・アメリカの高校の事例を通して-海外の高校における探究学習-スウェーデン・アメリカの高校の事例を通して-、日本カリキュラム学会第24回大会、上越教育大学(新潟県上越市) 2013年7月5日。

高橋亜希子・川島大輔・黒谷和志・東海林秀樹・市原純・福井雅英、教育実践現場と研究:フィールド研究を通じた実践者の成長と課題、日本質的心理学会研究交流委員会シンポジウム、北海道教育大学札幌サテライト(北海道札幌市)、2012年11月11日。

高橋亜希子、<生(ライフ)>にふれる声を聴き、<私>のことばで語り合う-いま、臨床教育学の展開に期待すること、北海道臨床教育学会第2回大会、札幌ランブラザ(北海道札幌市)、2012年7月22日。

〔図書〕(計1件)

高橋亜希子、東洋館出版社、総合学習を通じた高校生の自己形成、2012年3月、全221p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 亜希子 (TAKAHASHI Akiko)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90431387

(2) 研究協力者

望月一枝 (MOCHIZUKI, Kazue) 秋田大学
大津尚志 (OHTSU, Takashi) 武庫川女子大学短期大学部